SOUL EATER SOULxKID fanbook

a sequela to “Syoku”.

Sugar sweet nightmare

（――……）

意識は闇の中にあった。

四方の感覚は曖昧で、奇妙な浮遊感だけがそこにある。音はなく、色もない。身体を武器化させている時に『見える』世界に近似しているが、しかしあの時ほどに五感が研ぎ澄まされている訳でもない。

これは夢なのだろう、とソウルは自らの精神が漂う場所を認識した。覚醒する間際、いつもみる夢。だからこの後の展開は把握している。濃密な闇に塗りつぶされた意識の片隅に、やがて小さな光が生じる。周囲を満たす無量無辺の闇が、歪み、捩れ、次第に形を変えていくのがわかる。

閉ざしていた瞼を、ゆっくりと上げたソウルは微かに目を眇める。それは窓から差し込む爽やかな朝日の眩しさに、ではなかった。

室内にいくつもあるキャンドルの仄かな光。赤い暗幕を垂らした広さの把握できない空間。赤黒の幾何学模様を描く床を、視線で辿った先、部屋の中央にあるピアノは奏者の訪れを待ち沈黙を守っている。

静寂に満ちた空間に、不意に何かの音が生じた。見れば、音盤がひとりでに回り始め、クラシックな蓄音器からは調子外れなジャズが流れだし、どこから現れたかダブルのスーツに身を包んだ醜悪な小鬼が、それに合わせてステップを踏む。

此処は自らの精神の狭間。何処にも存在しない場所。

ああ、いつもの光景だ。

倦んだ思いでそれらを眺め、気が付けば腰掛けていた椅子に頬杖を突いて、ソウルは足を組み直した。

「いい加減、見飽きたよな。この部屋も、お前のシケたツラも」

「そうかい。じゃァ、ゲストでも呼ぶか？」

小鬼がピアノの上をちらりと見遣る。つられてそちらへ視線を投げたソウルは、楽しげな様子の小鬼とは対照的に苦い表情を浮かべた。

振り子の止まったメトロノームがそこにある。
決して己の歩調を乱すことなく、正確に拍を刻む、指針となるべき何か。それはあたかも拍節器の如き、誰かを想起させる物体。
「……何のマネだ？」
他意識の外部的干渉を受け変容した精神の軌跡でもあるそれが、何故未だにここに存在するのかということにソウルが考えを巡らせた時、「一人寝が、寂しい夜もあるよなァ」と小鬼が歌うような調子で言ってパチンと指を鳴らす。
部屋の奥にあるキャンドルの一つに、ぼうっと蒼い灯がともる。と同時に、それまで他者の存在など感じさせなかった室内に、明らかになにかの気配が生じた。
「……オイ、」
「なーに、驚くこたァない。物理的な距離なんかは関係ねェのさ。そら、恋人同士って奴は、心で繋がってるモンだろ！」
「だからって」
「……月光の冴え渡る夜は、狂気もよく浸透すんのかもなァ？」
「てめェ……」
「……煩い。寝ていられんではないか」
眠たげな声が、二人の会話に割って入る。気配が生じた瞬間から、もう分かっていた。その声の主が、誰であるのかなど。
常ならば、よく通る凛とした声が、今は明らかに不機嫌を滲ませ掠れている。
「キッ――……ド、」
それが寝起きの所為であることを祈りながら、振り返り恋人の名を呼ぼうとしたソウルの言葉は途中で途切れた。
彼の予想通り、気配はキッドのものに相違なかった。いつかの時と同じようにソファに身を凭せ掛け、眠そうに目を擦っているキッドは白いリンネルのパジャマを着ていたから今度もやはり、睡眠中であったのだろう。
けれどそんな事には気が回らないほどにソウルは動転していた。驚愕に見開かれたままの彼の赤い瞳を、不思議そうに見詰め返してキッドは首を傾げる。
「……なんだ？　その顔は」

「な、……んだって、……お前、……そりゃあ」
言葉が切れ切れになったのは動揺の表れだ。何かの錯視ではないだろうか、と、まず自らを疑い目を擦り、次に、彼らしからぬ冗談であろうか、とキッドの顔を凝視する。そんな恋人の不躾な視線を、受け止めてキッドは軽く眉を寄せた。
「……俺の顔になにか、ついているのか」
「いや……顔、っていうかその、……ちょっ、タイム！」
言いながら小鬼の首根っこをひっつかみ、部屋の隅へと引き摺って言ったソウルを怪訝な目で見遣って、「……ふぁ」と小さく欠伸をしたキッドはソファに凭れかかる。
「――……ん……にゃ」
まるで子猫のような呟きと共に目を閉じたキッドの頭の上で、――なぜか獣の耳のようなものがぴこぴこと動き、上衣の裾からは、耳と同じ色をした、漆黒の尻尾が覗いていた。

＊　＊　＊

「……オイ！　どーなってんだよ、アレは！」
声のボリュームを落とし小鬼に詰問しながらソウルは恐々と背後を降り返る。ソウルと小鬼、二つの視線の先にいる『アレ』は、今はソファの上で丸くなって目を閉じ、ゆらゆらと尻尾を揺らめかせている。
「お気に召さない？」
「召すわけねーだろ！」
「huh？　そりゃーおかしいなァ。此処はお前の脳内会議、お前の深層心理、お前の無意識の海、そうだろ？」
「……ぐ、」
調度品から服装に至るまで、此処にある全ての物は自らのイメージの産物であり心象の投影であるのだという小鬼の指摘に、ソウルは言葉を詰まらせる。ならば、あの奇妙な物体もまた、自分の無意識に沈んでいたものに違いないのだ。
「そういやァ、昨日寝る前に」
「！　……、」

「……風呂上がりの猫がタオル一枚で家ん中ウロウロしてたっけなァ」
追い打ちのように掛けられた言葉に、ハッとソウルが何かに気付いたような顔をした。
またそんな恰好で、と嫌な顔をするマカをものともせず。ご機嫌なバスタイムを過ごしたブレアが、上気した肌を厚手のタオルで隠しただけのあられもない姿で、部屋を歩き回っていたのを覚えている。
すらりと伸びた脚と、豊満なヒップを何とはなしに目で追いながら、猫の耳は頭の上に変わらず存在するのに、あの尻尾は一体どこへ消えてしまうのだろうか、なんて事を、……ぼんやりとではあるが確かに、考えたのだ。
『『やーらしい目で見てる』って言われてチョップくらってたのは、さて誰だったかね」
「……うるせェよ」
「で、その知的好奇心の顕れが、アレってワケか？」
「うるせェっての」
「単純」
「黙ってろ！」
反論らしい反論もできず声を荒げたソウルはやがて、はーっと疲れたような溜息をつき肩を落とした。つまるところ、キッドからの思念と自らの雑念が、何らかの形で融合した挙句この有様、ということだけは十分に理解できた。
「……待つしかねェか。醒めんのを」
この『夢』が、と苦い顔をするソウルに、「何言ってんだ」と小鬼がにやついた笑みを浮かべる。
「欲望ってのはな、満たすためにあるんだぜ？」
「何？」
「そんな怖い顔すんなよ、兄弟。満たしてやりゃあいいだろ、お前のその、……探究心ってやつをさ」
小鬼の骨ばった人差し指が、ソウルの胸あたりを軽く突く。さしたる力も込めていない筈だのに、ソウルの足元がぐらりとよろめいたのは、その言葉の持つ引力の所為であったのだろうか。
嘲るような笑いを残して、「お邪魔虫は引っ込んどいてやるよ」と部屋の奥へと消えた小鬼を、しばし呆然とした表情で見送ったソウルは、相変わらずソファの上で安らかな寝息を立てる闖入者を見遣って、再び小さく息をついた。

＊　＊　＊

「猫も、夢って見るんだっけか」
キッドの丸まっているソファに、自らも腰を下ろしたソウルは軽くタイを緩め、上着を脱いでソファの背に乱暴に引っ掛けて、傍らで身を丸めている恋人に視線を落とす。
目に映るものは紛れもなく自分の無意識が創造する心的夢であって、しかし同時に疑似的共鳴でもある。つまりこの『夢』は、以前と同じ、キッドの意識が干渉し見せているものだ。共鳴とは、一人では図れないものなのだから。
（っつっても、キッドはまだ戻ってない筈――）
死神様の勅命を受け、パートナーを伴い任務についている彼の恋人は、今はこのデス・シティから軽く五千マイルは離れた土地に居るはずだ。なのに、何故。
（……ヘンな癖でもついたか？）
小鬼の言葉を真に受けるではないが、この邂逅を齎したものが時間も距離も容易く越えてしまう程の強い思念ありきなのだとすれば、――それは恋愛と言うありふれた事象の中に身をひそめるもの、確かに狂気とも呼びかえられるべきものなのかもしれない。そう、『恋が狂気でないとしたら、そもそもそれは恋ではない』のだ。

「……んなに、俺に逢いたかった？」
「……」
聞いているのかいないのか、時折、うにゃうにゃと寝言のようなものを零すキッドの頭の上で、髪と同じ色をした耳がぴくぴくと動いている。丸めた背が波打つように動き、パジャマの上衣から覗く尻尾は時にゆらりと揺れる。それはまるで、本物の猫であるかのように。
起こしてしまうかもしれない。そう思いながらも、やはりその不可思議なモノに触ってみたいと言う欲求を抑えることは難しく。
頭の上に生えたものに、そっと手を伸ばす。ハロウィンパーティーの小道具のような、カチューシャにつけられた偽物などではなく。確かに血の通った、猫の耳だ。触れよ

うとするソウルの指を、避けるかのように微かに反応したそれは、触ると少しひんやりとしていた。
毛並みの良さは流石血統書付き、といったところだろうか。上質なビロードを思わせる、なめらかな手触りの黒い毛に覆われた耳は、ご丁寧に左の側にだけ白いラインが入っている。
（……言わない方がいいんだろうなァ……コレは）
笑みを堪えて微妙に引き攣った表情で猫耳を眺めるソウルの傍らで、キッドが少し身動ぎした。
「あ、……悪イ。起こしたか」
「……ん」
掠れた声と共に少し瞼を上げたキッドは、ぱちぱちと瞬きをしてソウルを見た後、軽く丸めた指で眠たげな目を擦る。その様子は猫が顔を洗う時の仕草に酷似していて、やけに愛らしい。どこか落ち付かない気分でそんな仕草を眺めるソウルをしばらくじっと見詰め、やがてその口元が微かに動く。
ソ、ウ、ル、――声には出さず、恋人の名を形作った薄紅色の唇が、あるかなしかの微笑を浮かべ、誘うように、媚びるように薄らと開く。潤みを帯びた瞳で見上げるさまに、理性のぐらつきを覚え思わず唾を呑んだソウルをよそに、「くぁぁ」と小さく欠伸をしたキッドは、上げかけた頭を再び落として、そのままよじよじとソウルの膝の上に乗り上げてきた。
「おい……、キッ」
呼び掛けが途切れる。一瞬言葉を飲み込んだソウルは、やがて奇妙な形に唇を歪めた。それは、沸き上がる擽ったさを堪えてのことだ。
見れば、膝の上でごそごそと蠢くキッドが、猫の手を模るように軽く丸めた手指で、もみもみとソウルの内腿を押している。マッサージでもするかのようなその仕草に、ソウルは笑いたいのを堪えてキッドの手を留めた。
「ちょ、……ッく、ク、……おい、やめ、ろって」
擽ったさだけならば我慢もできようが、同時に募る妙な感覚はちょっとなんだか、まずいような気がして。
手を遮られ、少し不満気に鼻を鳴らしたものの、ふいっと顔をそむけたキッドは、腿の上あたりへ頭を擦り寄せてくる。やがて具合のいい位置を見つけたのか満足そうに目

元を緩ませ、そのままソウルを枕替わりにまどろみに沈んでゆく。

「キッド」

大人しくなった恋人に、呼びかけてみても小さな寝息が答えるだけだ。散々人を振り回した挙句の所業に、ソウルはやれやれと苦笑を浮かべた。そういうマイペースな振舞いは、猫耳があろうがなかろうがあまり変わらない気もするな、などと思いながら、そっと咽喉の下あたりを擽ってみる。丁度、本物の猫を構う時のように。

「……にぁ」

外見に合わせて次第に中身も引き摺られてしまうものなのだろうか。もはや人語を忘れてしまったかのよう、発する声はまるで猫そのものだ。ゴロゴロと咽喉を慣らしたキッドの、感情を表わしてかその尻尾がぱたぱたと揺れている。

猫が何かを揉む動作ってのは確か、甘えたい時だったっけか。

パジャマの背中を撫でながら、そんな事を思い出す。基本的に甘え下手なこの恋人が、胸の内に秘めるものをそんな形で引き出してしまうのだとしたら。いや猫耳恐るべしだな、などと思いながらソウルはキッドの髪に指を通した。

「……俺も、逢いたかったよ」

囁いて、頬にくちづける。goodnight の意味を込めて落としたキスであったが、彼の膝でとろとろとまどろんでいた猫は薄く目を開け、眠たげな目をしたまま、けれど『もっと』と強請るようにその唇を寄せてきた。

「ん、……ん」

いつもよりざらつく舌でソウルの唇をぺろりと舐めたかと思うと、自らの唇をつきだし、啄ばむような軽いキスを繰り返す。そうやって吐息が交わるたび、幸せそうに目を細めるその様子に。

（可愛いじゃねーか、くそ）

煽られてつい、頬に添えた指が首筋へと滑っていったのは不可抗力だ。

「にゃ、――……ぁ」

項を撫でた指先に反応して、肩が小さく震える。常ならば、擽ったいだのなんだのと理由を付けてはその手から逃れようとするキッドが、いまは抵抗するでなく小さく鳴い

て、頭の上で猫の耳が微かに揺れた。
ふっと息を吹きかけてやると、ぶるると震えた耳が、今度は弾けたようにピン！　と真っ直ぐ上に立つ。
（――ん、怒った？）
僅かに警戒して身を引いたソウルの、胸の辺りをぎゅっと掴んだキッドが、はぁ、と小さく零した吐息は少し熱を持ち始めていた。
「キッド」
ソウルの声に、顔を伏せたままの恋人は何も答えない。けれど何かしらの刺激を受けるたびに、その耳はぴくん、ぴくんと可愛らしく震え、かと思うと、ふるふると揺れて、ふっと伏せられる。
（うーーん。……なんつーか、……これは、）
しなやかな耳も誘うように揺れる尻尾も、本人よりずっと素直で表情豊かで、だからもっといろんな顔を見たくなって。ぱたり、とソファを叩く尻尾を優しく撫で付けると、心地いいのか、キッドは金の双眸を潤ませてソウルを見上げてくる。
「！　……、あ、」
そろそろと尻尾を辿り、パジャマの内側へと手を滑らせる。背骨の下の窪みあたり、尻尾の付け根に指先が触れた時、滑らかな手触りの尻尾が一度、ぴんと伸びる。それまでより大きく身体を震わせたキッドが、切なげに鳴いて眉を寄せた。
（……あ、……そっか）
猫にとって、尻尾の付け根は謂わば性感帯だ。軽く擽り、優しく引っ掻く様に撫でるソウルの指先に応えて、キッドの鳴き声が次第に甘く掠れていく。そんなところまで猫なのか、とある意味感心しながらふと、ソウルはこの事態を招くひとつの切欠となった同居人の事を思い出した。
或いはあの魔猫が、人と同じ形をとるときに尻尾を隠している理由も、そういう所にあるのかもしれない。
あれは人を誘惑する側に立つものだ。なればこそ、晒す弱点は、少ないほどいいに決まっている。
一つの謎は解けたがしかし、知的好奇心の全てが満たされたかと言えば、そういう訳でもなく。
「……にゃ、ぁ……ふ、ぅぅ……」
ソウルの腕の中で、小さく身体を震わせながら鳴く猫の

身体は、どんどん熱くなっていく。柔らかな毛を纏う尻尾がくたりと垂れて、愛撫する指先の動きに合わせるように頼りなく揺れている。偶にひくんと持ち上がっては腕を撫でるそれに、「擽んなよ」とソウルは小さく笑った。

（……？　裏返し……？）

それまで別のところにばかり気が行っていたせいか。ボタンを外そうとして初めて、キッドがパジャマを表裏に着ていることに気が付く。

超が付くほど几帳面な筈の彼が何故そんな、器用な間違いを犯したのか。気にならないではなかったが、今のソウルにとってはそれよりも、重要な事は他にあった。

「にゃ、ううぅ……んぅ！　ぁあっ、にゃぁっ、ううぁん、うぁ、ふぁ…ぁ、っ！」

その肌に指を滑らせるたび、鳴き声とも喘ぎ声とも判別のつかぬような甘い声があがる。ソファの背に掛けたままだったスーツの上着が、床へと滑り落ちたのが視界の端を掠めたが、そんなことはもはやどうでも良かった。

ただ一つ、気になるのは、この夢が醒めた後の事、……キッドがデスシティへ戻った後の事、だけで。

なにしろ前科のある身だ。だのに懲りもせずこのような、不埒な真似を働いたことを、彼はきっと記憶しているに違いないだろうから。

頭を過るビジョンを憂いてふと遠い目をしたソウルの、意識を揺り戻すように、しがみつく腕が強くなる。

「ん……ああ。わかってるよ」

見上げる瞳が求めるものを、そして自らの『知的好奇心』の行きつく先を、彼は正しく見通していた。

（……死神チョップ一発、……いや、二発？）

それぐらいなら甘んじて受けようではないか。後のことは後で考えればいい、とただ情動の赴くままに、今この瞬間を享楽に耽ることに決めて、ソウルはそのままソファへと体と意識を沈みこませていった。

Stray Cat

クラシックな黒電話はそういえばマカのアパートにあったのと似た感じかもしれない、などとパティがぼんやり思い出したのは、彼女の主がその電話に視線を留めたまま、難しい顔をしてその場に立ち尽くしていたからに他ならない。

「キッドくん。かけんの？　電話」

「……ん、……いや」

言われて初めて自分がその通信端末を凝視していたことに気付いたようで、我に返ったキッドはほんの一瞬、狼狽したように視線を彷徨わせた後、やがて軽く首を横に振った。

「同じ型式のものだな、と思っただけだ」

「マカん家のと？」

「……ああ」

敢えて強調された名前を否定するでなく頷いて、キッドは既に照明が落とされ薄暗いホールのソファに腰を下ろし、手にしていたオイルランプをテーブルに置いた。暖炉の火は消されていたが、室内の空気はまだ仄かに温かさを残していた。

＊　＊　＊

デス・ザ・キッドとそのパートナーであるトンプソン姉妹がドイツ中北部へと赴いたのは、鬼神解放と狂気蔓延により活発になりつつある魔女会の動向を探るためだった。古くから魔女の聖地として知られ、数々の伝承を残し、また実際の活動事例も多く確認されているハルツ地方は、それだけに平時から死武専の監視の目も厳しい区域だ。

滞在中の拠点として現地の職員から案内されたヒュッテは、死武専の活動拠点としてではなく、情報収集の面に重きを置いて、通常は一般の観光客や登山者を相手に運営されている。そのためいつも利用する宿泊施設よりも物々

しさが薄く、ともすれば観光気分で売店など覗いていたリズの表情が一瞬強張る。怪訝な顔をしてキッドを振り返った彼女に、キッドは『知らぬふりをしろ』と目で指示するに留めて、何事もなかったように三人の名前を宿帳に記帳した。

「魔女グッズとかー、いいのかねぇ」

一般の土産物屋ならともかくさ、と部屋に向かう途中の廊下で、先程目にしたものについて、潜めた声でリズは疑問を口にした。

「あれらはすべて魔術的意味の薄い、『おまじない』のようなものばかりだ。製造は死武専で行っているし、収益は運営に充てられる。実際に魔女が関わっているわけではないのだから、問題はないだろう」

「まぁ、理屈じゃそーだけど」

「……民間レベルでの魔女信仰はある程度は目零しされている。仕方があるまい」

応えた彼女の主の声は苦味の欠片さえ帯びてはいない。巨大組織を統括するものとしての、『大人の』考え方を模倣する彼の立場を、察してリズはそのまま口を噤んだ。自分達は何も、魔女会殲滅のために派遣された訳ではない、ということを彼女も理解はしていた。

鬼神捜索に必要以上の人員を割いている現状、魔女側との表だった衝突は避けたいというのが死武専側の本音だ。現状把握のための視察、万一動きを見せるようならば何らかの警告を与えるため、キッドが死神代行として勅命を賜ることとなった、というのが事のあらましだった。

滞在七日目は悪天候の為ろくに身動きが取れず、活動内容は観光客相手の情報収集、という名の世間話にとどまり、三人は殆どの時間を談話室か割り当てられた部屋で過ごすかしていた。

昼間は彼女らと同じよう、足止めを食った旅行客が集まり和やかに談笑していたホールも、今はひと気が無くしんとして、風が窓枠を揺らす音だけが響いている。実際の室温とは関係なく、人がいないというただそれだけで、場の持つ温もりのようなものが失われてしまったようにさえ

思える。ほんの少しうすら寒いものを感じながら、キッドの隣に腰掛け背を丸めて、短く吐息をついたパティに、「どうした」と彼女の主が問いかけた。
「おなかへっちった」
「……。こんな時間にか。夜分の飲食は関心せんな」
渋い顔をするキッドに、にひひ、とパティは屈託のない笑みを返した。

部屋を出る足音を聞き逃したのは、窓の外で轟々と吹雪く風音に紛れた所為か。部屋の寒さで目を覚まし、トイレを済ませたパティが、階下へ降りてゆく主の気配に気付いたのは全くの偶然だった。
「うーー、寒っみいねー。……ホットチョコレートかなんか、貰おっかなーって」
オーナーどこにいんだろ、とぐるりと首を回し、ひっそりとしたホールを見渡したパティの傍らで、キッドはやはり先程の黒電話をじっと見詰めていた。
「かけないの？」
受話器を手に取るでなく、しかしその場から立ち去ることもできずただ無言でソファに身を沈めているキッドに、パティが再度促す。
「あー、わかった。気にしてんだ、アレを。……なんだっけ、……爺さん？」
「……時差、のことか」
「そうそうそれ。デスシティって、今何時だっけ」
「朝の七時ごろだろうな」
「じゃあ、ちょうど起きた頃じゃん？　……あーいや、まてよ。アイツまだ寝てっかなぁ」
「……、いや。いいんだ」
言わずとも、誰の事を指しているのかを察して、弱々しく頭を振ったキッドに、「なんかあったの？」とパティは首を傾げた。
「そう、見えるか」
「ん～。なんだろ、なーんとなく」
共通の友人であり、またキッドにとってはそれ以上の存在でもあるあの魔鎌との間に、何かがあったのか。寧ろ『何もなかった』からこその変調であろうか、とも思わないではない。何しろ彼女の主は死武専に戻ってからというもの、

友人との再会を喜びあう時間すらろくに設けず、世界中を忙しく飛び回っていたのだから。

何かに追い立てられるようにして、碌に死武専にも顔を出さなかった時期に比べれば、いくらか険の取れた表情ではあるが。それでも、どこか思いつめたような顔をしている、と思う。

そっと彼の横顔を盗み見る。電話機から目線を外し、しかし今度は窓の外を見詰めたままじっと黙りこんでしまったキッドの白い横顔に、ランプの灯が陰影を作り、幻想的にすら見せていた。

（死神サマなんだよねぇ、……こーんな細っこくて、空気読まなくて、時々アホでも）

口にすれば『お前に言われたくない』と渋面を作るであろう感想は、胸に仕舞っておいた。

瑞々しく雄々しい波長がときに、凍てつくほどの昏さを纏う。そのような二面性も、彼が生と死という二つの性質を持つものだからだろうか。精密な人形のように造作の整った顔立ちでありながら、けれど偶像的な空疎な美しさとも異なる主の横顔を、なんとはなしに眺めながら、取りとめのないことを考える。

その対称的かつ同期的なものを司る、人智のおよばぬ存在であるはずの彼が今は、闇に溶け儚く消えてしまいそうな、頼りなげな目をした少年にしか見えない。

危うささえ湛えた瞳に、胸がきゅっと締め付けられて。

無意識に伸ばした手が、キッドの肩に触れようとして一瞬躊躇い、そしてそのまま彼の頭にポンと乗せられた。

「……、何だ」

「んんー。……うちのご主人さまは相変わらず、肝心な時ほどヘタレだなァーって思っただけ～」

平常運転だネ、とキッドの黒髪を撫でる。よしよしと幼児を宥めるような仕草を受けて、彼女の主は無言のまま憮然とした表情になった。

（ほんと肝心な時ほど、なーんも言わないんだもんなァ）

キッドがシンメトリー以外の何事かに強い執着を見せるのを、およそ見たことがないなとパティは思う。

それは、欲しがる必要がないからだ。たとえ両の手が空

だろうと、望みさえすれば、彼はすべてを掌中にすることができる。そのように生まれついたキッドを、自分たち姉妹とは違う『恵まれた』存在だと、――思っていたのは最初だけだった。

「あのねえ。ゴミはブーって鳴くし、ブタはニャーって鳴くよねぇ」

「？」

言いながら、パティはいつものように笑おうとした。いひひ、と声に出してみて、けれど思ったより上手くは笑えなかった。

「ネコは鳴かないんだ、……きっと、鳴き方がわかんないんだね」

願うことを知らなければ、叶えられることもない。

誰しもが、己の掌で掴み取れるほんの僅かなものに、心を砕かずにはいられないというのに。願い方を、或いはその加減を知らぬが故に、手に入れてしまうことを恐れるが故に、彼はこうして立ち尽くすのだろう。

（……ずるいよなぁ、キッドくんは）

これからも頼む、と姉妹に告げた時の彼は、確かに神であったのに。誰に請うでなく、自分自身をどう扱えばいいのかも掴めずに、ひとり絡み縺れる感情を持て余すさまは、人の子とさして変わらぬようにも錯覚されて。その落差を目の当たりにして、手を差し伸べずにいられないのかもしれない。

ずるいよなぁ、とパティは再び胸の内で繰り返した。

いつか躊躇いもなく伸ばしたその手を、――無邪気に掴んで繋いで振り回して、あの薄暗いストリートの一角から、こんなところまで引っ張り上げたその手を。伸ばせないのはつまり、渇望を上回るほどに喪失を臆してしまうようなものが、自分たち以外に存在するのだと告げられているのと同じで。

「いいコト教えてあげよっか！」

軽い鬱憤を、晴らすように張り上げた声がホールに響く。

結局、主のごたごたは、自らのごたごたでもある。

決して面白くはない結論を導き出してなお、いつものよ

うに振舞うことしか出来はしない。宥めてすかして叱咤して、時にその背を蹴り飛ばしてでも前に進ませる。分かってはいるのだ、それが自分に与えられた役割だと。

「こないだ、お泊まり会したときに聞いたんだー。……『恋のおまじない』ってヤツ？」

「……？　呪いなど、」

「電話もかけらんないアナクロ坊ちゃんにゃ御似合いだ」

「！　……」

一瞬目を瞠り何かを言いかけて、結局何も言えず肩をすぼめたキッドに、けらけらと笑って見せる。

主がそう望むのだから。背は押さねばなるまい、……但しその方角なんか保障はしない。力加減だって、少―しばかり緩めでもいいはずだ。何しろ神様ってやつは何事につけても全力で、要領というものを知らないのだから。

そんな事を思いながら、パティは人差し指を唇にあて、何事かを思い出すように視線を天井へと逃がした。

「んっとねえ。確か寝るときに、パジャマを裏っ返しにして着ると―……」

――そしてパティから教わった『おまじない』を、律儀に遂行したキッドが果たして、夢で思い人と巡り合えたか否かは、また別の話。

sequel ：続編／後編／後日譚

sequela：余病／後遺症

afterword

　新刊の後日譚を書こうと思ったら全然関係ないもんができたけどまァいいかー。
　妄想と欲望と恋心を、狂気の力で混ぜ合わせた感じの。いつか超かわいい猫キッドを描いてくれたよねもり夕子さんへ勝手に捧ぐ。

　なんかまァそんな感じで、ソウルイーターオンリー開催おめでとうございます。わくどきが止まりません。
願わくば、貴方に素敵な出会いが訪れんことを！

それではまたいつか、どこかでお目にかかれることを祈りつつ。ごきげんよう！

ONO 拝

[a sequela to "蝕"]

2012.02.12　quadra / ONO

web >>
http://blue.zero.jp/quadra/
mail >>
quadra88@gmail.com

■無断複写転載禁止

01 sugar sweet nightmare

02 stray cat

quadra2012-02-12